■表意文字といふ名称について

ここでは岩波新書『文字の歴史』から引用することにする。イギリスのムーア・ハウスの著で、ねず・まさし氏の訳である（訳文は現代かなづかひ）。

この本に依れば、「文字は、言葉とは別に発生したもの」となってゐて、だから、「文字と言葉との間には何の連鎖も存在しなかった」と書かれてゐる。

つまり、ムーア・ハウスの考へは、「文字は、言葉ではなくて、物そのもの、事そのものを直接表すものとして作られた」と言ってゐるのである。かうすれば、“表語文字”ではなくて“表意文字”と呼ぶ理窟が成り立つわけである。

然し、この説明は現実を無視した、単なる理窟に過ぎない。仮に「文字が、物そのもの、事そのものを直接表すために作られた」としても、それが文字として通用するためには、それが何を意味する符号であるか、といふ人々の共通理解を得る必要がある。

その共通理解を可能にするものは、何と言っても言葉であらう。例へば、“山”といふ漢字が“山”そのものを直接表した文字として作られたとしても、それが“山”を意味する符号であることの共通理解を得るためには、「これは“山”を表した符号ですよ」と、“やま”といふ言葉を使って理解してもらふのが最も手っ取り早く、最も確かな方法である。“やま”といふ言葉を使はないで、“山”といふ字をどうして教へるのか、ムーア・ハウスにやってみてもらいたいものである。

“やま”といふ言葉が無いのなら仕方がないが、言葉はそれよりもずっと遠い昔から存在してゐるのである。だから、言葉を使はないはずがないと思ふのだが、ムーア・ハウスは「文字と言葉との間には何の連鎖もなかった」と言ひ切ってゐるのである。

では、ムーア・ハウスはなぜこのやうに無理な考へ方を強行したのであらうか。それは勿論、「文字が初めから言葉を表したものである」と認めたら、「文字は初めから意味をも発音をも表してゐた」と認めなければならなくなるからである。

さうなれば、“表意兼表音文字”が単なる“表音文字”になることは、「進歩である」とはとても主張することが出来なくなる。どうしても「言葉と関係なく作られた」として“表意文字”の名を与へ、「表意文字が表音文字になることこそ進歩である」と主張したかったのである。